法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-02-05

資格課程の思い出 ： 法政ミュージアムまでの道のり

金山，喜昭

(出版者 / Publisher)
法政大学資格課程
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
法政大学資格課程年報
(巻 / Volume)
9
(開始ページ / Start Page)
93
(終了ページ / End Page)
96
(発行年 / Year)
2020-03-31

資格課程の思い出

法政ミュージアムまでの道のり

法政大学キャリアデザイン学部教授　金山喜昭

2020 年 4 月にいよいよ法政ミュージアムがオープンする。ミュージアムの設立は、2014 年に就任した田中優子総長の公約であった。私も大学ミュージアムの設立の契機に多少なりとも関わりをもつことができたことから、これまでの経緯を自分なりに振り返ってみることにしたい。

清成総長の言葉

2002 年に法政大学に着任した当時、翌年開設をひかえたキャリアデザイン学部の設置準備の時期であった。設置準備委員長の笹川孝一教授に同行して清成忠男総長に面会したところ、博物館学を専門にする私に対して、総長は大学博物館の必要性を説かれるとともに、大学博物館に関する情報を集めてみるように勧められた。それまで、法政大学には大学博物館をつくるような雰囲気は無いと聞いていたので、清成総長からの一言はとても意外であった。そして、もしかしたら将来的に大学博物館をつくることができるのではないか、という光明を見るような思いがしたことを覚えている。

大学博物館については断片的な知識しかもたなかったので、さっそく国内の大学博物館を調べたところ、国内 764 大学（短期大学を含む）のうち 200 ほどの大学には、種類や規模の違いはあるものの、何らかの博物館施設があり、東京六大学にいたっては本学以外、全ての大学が博物館施設をもっていることが分かった。それらは大学史、重点的に取り組む人文系・自然系・理工系の専門分野（考古・歴史・民俗・動物・植物・理工系など）、大学の最新研究成果などに関する資料や研究成果を広く公開している。学芸員や研究員など専任職員を配置するところも多く、資料の収集、整理保管、調査研究活動が堅実に行われている。

また当時、国立大学では国のユニバーシティ・ミュージアム構想による大学博物館の整備事業も進められていた。学内に分散する研究資料を博物館が一元的に保管管理して学術資料の活用の利便性をはかることや、大学教育での活用、大学の知の体系を社会に公開することなどを意図するものであった。

資格課程委員会からの要望書

そのような大学博物館の現状を踏まえて、同じ資格課程の笹川教授も法政大学に大学博物館が必要不可欠であることを強く主張していた。資格課程委員会でも、本学の大学博物館の必要性を議題に取り上げて、大学博物館の設立を要望する決議を経て、委員長名で総長あてに要望書を提出した。仄聞によれば、清成総長の次の総長になった平林千牧総長や、次の増田壽男総長の時代にも大学博物館を考えたときに大学史（大学史編纂室）との組織上の位置づけなどについて話題になったこともあるらしいが、詳しいことは承知していない。

2003 年にキャリアデザイン学部が開設されたが、初代学部長の笹川孝一教授は学部長の人脈を

生かしてミュージアム設立の可能性について学内を奔走して、市ヶ谷キャンパス再計画の校舎建て替えに大学博物館を含めることができないかを模索してくれた。しかし、建て替え工事といっても既存の床面積より拡大することが許されず、大教室不足を補う対策を講じることが大きな課題になっていたことなどから、大学博物館の専用スペースを確保することは無理とのことであった。一時は、外濠校舎（2007 年竣工）のワンフロアを確保することができる可能性もあったようであるが、結局は 6 階にギャラリースペースを設けただけで、実際には頓挫した。笹川教授による精力的な努力にもかかわらず、諸々の事情のために、やむを得ず断念することになった。

資格課程委員会の委員長は、社会学部長が当たることになっており、2012 年には田中優子教授（現総長）が委員長となった。先述したように、資格課程委員会では継続的に大学ミュージアムの必要性については話題になっていたし、図書館長などとの連名で、継続して総長に要望書を提出していた。それまでの委員長も大学ミュージアムの必要性を認めてくれていたが、田中委員長は、さらに強い調子でミュージアム設置に積極的な姿勢を示された。

法政ミュージアムの企画書を作成する

2013 年に学部長になった私は、社会学部長の田中優子教授（当時、資格課程委員長）とは学部長会議などで同席する機会が多くなったことから、長年の懸案となっていた大学ミュージアムを具体化するために、増田総長に改めて要望しようと思うようになった。

但し、計画の前提条件は、「専用スペースを確保することができない」ということであったから、学内の遊休スペースや稼働率の低い施設などの転用をはかり、大学全体を博物館に見立てることを一案とすることにした。

その発想は、かつて在外研究でロンドン大学（UCL）に留学した時に、UCL 本校舎内の各所に絵画や資料の展示を見たことがあったからである。大学院のミュージアム・スタディーズコースでは、共通テーマの下、各グループに与えられた予算の範囲内で自由に展示資料を購入して行う実習展示は、ギャラリーに設置された展示ケースを用いて公開されていた。また、同大学の創始者のジェレミ・ベンサム（功利主義の創始者として知られる哲学・経済・法学者）に関する展示コーナーもギャラリーに面した一隅に展示されていた。そこにはベンサムの著作物のほかに、なんとベンサム本人のミイラが展示されていた。同大学のキャンパス内には、エジプト考古学者のペトリ―の考古学博物館のほかに動物学博物館、地質学博物館など専門分野ごとに膨大なコレクションを保有する博物館がいくつもあるが、本校舎でそれらとは別にトピック的な資料を展示公開していた。

法政大学ミュージアムの基本的な考え方は、市ヶ谷キャンパス全域を「大学ミュージアム」と見立て、各所をパーツ（Part）の展示空間として、複数のパーツを動線化して有機的な結合をはかることにする。そのために既存施設の再活用やコンバージョンをはかるというものであった。こうして UCL の経験を法政ミュージアムに応用することにした。

学部長懇談会からの要望書

法政ミュージアムの企画書は私が下書きをしたものをたたき台とし、田中優子社会学部長をはじめ複数の学部長とも相談をしながら作成した。要望書（案）を 2014 年 2 月の学部長懇談会に諮り、15 学部全ての学部長の同意を得ることができたので、全学部の学部長の連名により増田総長に要望書を提出した。

要望書には、まず法政大学ミュージアムの使命と目的を次のように記した。

- 教職員・学生・卒業生など本学の関係者のアイデンティティを高めるとともに、大学の知的・

文化的資源の共有化をはかる。―自校教育と法政アイデンティティ

- 本大学の学術研究・教育成果や社会活動を公開・展示することにより、高等教育機関としての社会的な説明責任を果たす。―社会的説明責任
- 本学の保有する知的資産・コレクションを社会に発信して、本学のブランド力や知名度を高める。―外部発信とブランド力の向上
- 大学のアドミッション活動の一環として、受験生・親・学校関係者等に本学の学術・文化資源を公開し、本学に対する認知度や理解度を向上させる。―アドミッション活動
- 千代田区内の大学博物館や文化施設との連携をはかり、東京を魅力的な文化都市にすることに貢献する。―地域連携と地域活動

そのような使命を達成するためにミュージアムは、企画・調査、収集・寄贈受付、展示、教育普及、展示解説、図録目録編集・発行、史料撮影、コレクション保存業務、デジタル映像化、関連イベント運営、博物館学芸員課程実習支援などの業務をこなすことや、大学史編纂室、野上記念法政大学能学研究所、沖縄文化研究所、大原社会問題研究所、国際日本学研究所、図書館、学生センター、国際交流センター、資格課程委員会、法友連合会、法大後援会など学内外の組織との連携をはかることが欠かせないことについても触れた。

ミュージアムを展開する場所については、ボアソナード・タワーの1階のアドミッションセンターに常設展示スペースを併設することや、キャンパス内のスペース（資格課程の博物館展示室、スカイホール前の展示スペース、外濠校舎の展示・掲示コーナーなど）を有効活用することを一案とした。アドミッションセンターを候補に挙げたのは、ミュージアムを「大学の顔」にするために、学外から訪れる人たちの目につく場所が良いためである。そこには法政大学の歩み（大学史）、法政大学人物史、体育会・クラブの活躍の紹介・ゼミナール等の成果の紹介や、企画展示は例えば人物伝・キャリアヒストリー（年譜・成果・賞・作品）、スポーツ：トピック・クラブ紹介・大会成果の紹介、文化・メディア：写真展・美術展・映画放映など作品展、研究史：各研究所の研究・人物史、各研究所の定期的な展示・新収蔵展、学生の社会活動（学生センターなど）の紹介、卒業生の活躍（校友連合会など）を紹介する案を掲げた。

学内の各研究所もコレクションを保有することから、それらもミュージアムの展示資料に活用することができる。大学史コレクション（大学史系研究部門）、能楽コレクション（野上記念法政大学能楽研究所）、沖縄コレクション（法政大学沖縄文化研究所）、国際日本学コレクション（法政大学国際日本学研究所）、大原コレクション（法政大学大原社会問題研究所）、図書館コレクション（稀少書文庫・書籍・美術品・資史料）、国内外の民具・郷土玩具・凧コレクション（資格課程など）、市ヶ谷校地や多摩校地の考古学資料（発掘出土品）コレクションなどがあげられる。

法政ミュージアムの構想は、ミュージアムがコアとなり、学内の研究所や図書館などとネットワークを形成するものである。ミュージアムがコーディネイターの役割をもち、研究所などはそれぞれの組織や運営の独立性を損なうことなく維持しつつ、ミュージアムとしてもミッションやそれを達成するための組織や人員配置をしつつ、研究所などのコレクションや教員の研究成果などを展示公開する束ね役となるようなイメージである。

法政ミュージアムは、それ以外にも多様な活動を期待することができる。オープン・キャンパス（オンキャン）など、受験生・志願者・高校関係者・親をはじめ受験関係者を対象にする大学案内の機会において、適宜「法政大学ミュージアム・ツアー」という時空間の充実を果たすことができる。大学ホームページ等のメディアに「法政ミュージアム」コーナーを新設または改訂設置して、ミュージアムの企画展スケジュールや関連事業などの情報発信もする。さらに地元・千代田区内のミュージアムやOB学芸員の所属・従事するミュージアム・関連施設とも連携をはかり、

併せて本学学生・教職員・OB との学術・情報交流を促進するなどがあげられる。

こうして全学部長による要望書を出したものの、残念ながら要望書に対する反応はほとんどなかった。それを特に話題にする学部長もいなかったこともあり、しばらく模様眺めの状態が続くことになった。

田中総長の誕生

そのような折、2014 年の総長選に田中優子教授が立候補を表明した。選挙公約の一つに法政ミュージアムの設立が掲げられているのを見て、とても頼もしく思われた。選挙結果は、田中教授が当選した。特にミュージアムのことが争点になったわけでないようであったが、他の公約とのバランスや知名度が高いことなどが評価されたのだと思う。いずれにしても、田中新総長の誕生により、ミュージアムの実現を確信することができた。

その後、公約通り田中総長のもとで法政大学ミュージアムの準備が始められ、2015 年 9 月頃から法政ミュージアム・アドバイザー会議も開かれるようになった。総長が座長となり、私を含めて学内の博物館や文化財行政の経験をもつ現代福祉学部の馬場憲一教授（現名誉教授）、人間環境学部の根崎光男教授、文学部の小倉淳一准教授（現教授）などが委員となった。総長室が進めるミュージアム準備について意見交換をはかる会合であった。2016 年まで 10 回ほどの会合がもたれたが、委員からは忌憚のない意見が出されたし、総長や総長室長からも丁寧な説明が行われた。

私は 2017 年に国内研修で 1 年間不在にしたこともあり、その後は特に意見を求められることもなく、総長室が主導的に準備を進められたようである。

法政ミュージアムに望むこと

ミュージアムにとって何よりも大切なことは、展示公開を支えるために必要な資料の収集や整理保管、調査研究とともに、ステークホルダーへの渉外活動などが行われなければ、正常なミュージアムとは言えない。そのためには展示スペースを確保するばかりでなく、収集資料を収める収蔵庫や、企画展などの準備をする作業室などを備えることである。そして何よりも館長や学芸員など人材を確保しなければならない。館長は、全体の業務を統括するばかりでなく、総長との意思疎通や学内部署との調整をはかり、対外的に渉外交渉のできるような人材が望まれる。また学芸員は専任職員を数名配置することである。最初から、全てを整えることが難しい事情もあるかもしれないが、これから施設や人員体制の充実に取り組まれることを期待したい。